

京都大学	博士（文学）	氏名	田中 健一
論文題目	飛鳥奈良時代仏教彫刻史における舍利信仰の諸問題 —唐代美術との関連を視野に入れて—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>仏陀または聖者の遺骨を舍利という。インドにおける仏教美術の出発点が釈迦の舍利を供養するストゥーパの荘厳にあったことに象徴的であるが、時代や地域ごとの思想的状況とも関連して軽重はあるものの、舍利信仰は、常に仏教に関わる造形活動の一大主題であり続けた。本論文で考察の対象としたのは、主に七世紀第四四半期から八世紀、飛鳥後期から奈良時代の仏教彫刻史における舍利信仰の諸問題である。また、この期の日本における造形活動にも大きな影響を持った中国則天武后期の作例も併せて取り上げている。</p> <p>本論文の構成は、「序論」に続き、四章からなる「本論」および「附論」があり、最後に「結び」を設けている。各論の概要は以下の通りである。「序論」では、「本論」で展開される各論での見通しを提示する。ここでは、まず本論文の主な問題意識を明示する。第一は、日本古代仏教美術史において大陸美術の受容がどのような意識を伴ってなされたのか、という問題。また第二は、日本仏教美術史において仏教思想と王権思想とが如何に関わり、それが如何に造形に反映したか、という問題である。殊に東アジアの仏教国においては、仏舎利の所持をもって正統の仏教国であることを内外に示すという意識が強くみられる。梁、隋といった、皇帝が「菩薩天子」をもって自ら任じた王朝は、いずれもが舍利に関わる大事業を展開している。本論文は、飛鳥後期という時期が、そうした意識が一つの高まりを見せた時期と考え、本論文では、この期から、上述の問題意識に照らして興味深い事例を選定し、中国唐代を中心に広く東アジア諸国の造形史、信仰史を視野に入れて位置付けるとした。</p> <p>さて、「本論」であるが、第一章「蒲州大雲寺涅槃碑像に関する考察」で扱われているのは、現在山西省芸術博物院に保管される大雲寺涅槃変碑像（蒲州大雲寺碑像）である。大雲寺は、則天武后が自らの政権を喧伝する目的で諸州に設置した寺院であり、碑像は作域や図像的な重要性からも唐代仏教美術中の最重要の作例の一つとして評価されてきた。その図像構成は、碑陽に純陀供養、涅槃、摩耶夫人の降下、摩耶哀慟、再生説法、葬送、火葬を、碑陰には舍利八分、起塔、三尊仏をそれぞれ表す。ここで論者は、造像記の読解を試み、併せて碑像に表された図像構成の検討を通じて造像の背景となる歴史的、思想的状況を論じている。</p> <p>第一節で碑像の概要を確認した後、第二節で図像的特徴に関する考察を、第三節で造像記の読解を試みている。碑像の図像構成上注目されるの</p>			

は、涅槃と共に弥勒下生を表す点、再生説法を伴うという点で、これらは則天期に顕在化した傾向と理解されるとした。またその一方で、敦煌第三三窟涅槃変相図や浜松市美術館仏碑像など、同時代の作例との間の図像細部の相違点を指摘し、地域的な文脈も考慮すべきことを主張している。なお、造像記を検討する中で、大雲寺碑像が単独での造像ではなく、蒲州大雲寺における「弥勒重閣」の造営事業と一連のものである点に大きな特徴がある点を指摘している。また、碑像の制作された蒲州大雲寺の前身寺院は仁寿寺と推定され、第四節ではここから二点が論じられている。第一に蒲州仁寿寺は隋代の仁寿舍利塔事業にも関連しており、こうした舍利信仰史上の重要性を、武后政権の側が利用したことが想定出来る点である。また第二点として、仁寿寺を中心に展開した蒲州における曇延系の涅槃宗の活動を、碑像を含む一連の造営事業の背景として想定したことである。さらに、第五節では、大雲寺碑像に酷似した図像内容を持ち、蒲州に隣接する安邑に伝来した涅槃変碑像を取り上げ、大雲寺碑像と比較検討がなされた。そして、涅槃経への関心が強い蒲州においては、再生説法や純陀供養といった図像は、如来常住思想に関わって捉えられた可能性があることが指摘されている。

この第一章を踏まえて、次章以降、日本での事例が検討される。第二章「長谷寺銅板法華説相図の銘文と図像に関する考察」では、奈良県長谷寺に伝来した所謂銅板法華説相図を取り上げている。本銅板は、『法華経』「見宝塔品」にその涌出の物語が語られる多宝塔を中心に、千仏等を併せ、押出、半肉鑄出、線刻等の技法で表現した古代仏教美術中の優品である。様式からは七世紀末から八世紀初め頃の制作が予想される。本章では、表題作品の細部モチーフを検討し、付された銘文を分析することで、銘文に語られる造像意図が図像選択に際して如何に影響したかを明らかにし、さらに銅板の図像に投影された天皇観を問うている。

第一節では銅板の銘文の解釈とその概要が紹介され、第二節ではその図様が「見宝塔品」の奇跡を視覚化したというよりも、「千仏」と「多宝仏塔」を表現することに関心が向けられているといった図像の特徴が明らかにされている。第三節では、「見宝塔品」を表す諸作例との比較検討、及び『法華経』成立史における「見宝塔品」の位置付けについて検討が行われている。その結果、その図様は、『法華経』「見宝塔品」の経意からは説明出来ない部分があり、それが同時代の東アジアにおける仏法と王権思想との結びつきを反映したものであることが指摘されている。具体的に注目したのは、銅板の千仏表現、及び多宝塔の表現である。銅板は、千仏中に如来倚坐像を配するという形式をとるが、これは龍門石窟萬仏洞や鞏県石窟千仏龕など、則天期を中心に遺例のみられる優填王像に類例が見られる。ここから、仏法の継承性と永続性を示唆し、ひいてはそこに帝統の継承を仮託する図像があると論者は想定した。また、多宝塔は、舍利壺を明

示する点に特徴があるが、「見宝塔品」の経説を表すという意識からは生じ難く、むしろ感応による多宝塔の涌出といった事例に類似性が見出される。ここで注意すべきは、前章で論じられたように、則天期を一つの頂点として、舍利は転輪聖王信仰と結びつくことで国家の正統性を保証する存在として捉えられる点である。多宝塔も舎利の涌出を主題の一つとし、背後には帝統の正統性を検証する意識があったとした。さらに第四節では、これに基づき、銘文に記される天皇比定の問題に言及し、天武天皇の皇統を意識した蓋然性が最も高いことを推測した。

第三章「法隆寺五重塔塔本塑像の主題構成に関する考察」では、日本古代彫刻史における平城京遷都後最初期の基準的な作例として著名な法隆寺五重塔塔本塑像群を取り上げている。本塑像群は、「涅槃」「分舍利」「弥勒仏」「維摩詰」という四主題を組み合わせているが、尊像構成については、第一節で述べられたように、幾つかの見解が提唱され、決着を見していない。そこで論者は、本塑像群の主題解釈上、特殊な方位関係と東面に維摩詰像土が配された思想的背景の二点の解明が不可欠とした。

さて、本章では、第二節から第五節で、各面毎に関連作例を挙げて主題構成の思想的根拠の検討がなされた。その結果、北面「涅槃」と南面「弥勒下生」という南北線を軸に主題が構成されていると論じ、この構成が則天期を中心とする中国の風を受ける可能性を指摘した。また西面の「分舍利」が、表現上北面の「涅槃」とは一続きのものとは言い難いことを示し、その上で西面の「分舍利」と東面の「維摩詰」がともに仏法相承の正統性に関わる主題構成であるとの見解を提示した。中国における維摩経変は、特に図像内容が充実する初唐期以降において、外国使節図や皇帝図を伴うものが散見される。これは『維摩経』「文殊師利問疾品」と「方便品」とを組合せ、中国における仏法の正統性に関わる図像として理解された可能性が指摘されており、舍利八分と同質の内容を含むものといえる。『維摩経』においては、弥勒菩薩が釈迦の後継者として委嘱を受け、また、維摩の出自は東方の仏国土である妙喜国であると語られており、こうした経典の内容が五重塔の構成に影響を与えた可能性を指摘した。第四節では、こうした主題構成が、前章の銅板と同質の意味を発生させると論じた。八世紀初頭は、儀礼や外交の場で前代とは異なった国家観が表面化し始める時期であり、大仏開眼会において奉納された芸能の上演など、八世紀中葉期に一層明確化する同心円的な国家観の萌芽ともいえるものが、法隆寺五重塔の主題構成に読み取りうるという解釈を提示している。

第四章「八世紀仏教美術史における舍利信仰をめぐって」は、八世紀の日本における仏舎利信仰と造形の関係性を扱っている。注目する事例は、『唐大和尚東征伝』の鑑真将来の将来品目に記される「如来肉舍利三千粒」及び「阿育王塔様金銅塔一區」である。前者は戒律の場で機能した可能性が高いことが指摘されており、これが舍利信仰の隆盛をもたらす一因となっ

たと想定される。第一節では、八世紀の舍利信仰の問題点が述べられ、仏像への舍利納入の事例に注目した。その現象の一つと目されるのが、隅寺毘沙門天より仏舍利が発現したことに端を発する一連の事件であるが、この問題を取り上げたのが第二節である。すでに指摘があるように、この事件は、光宅坊での舍利発現が武后政権の正統性の喧伝に利用されたことを受け、それが日本で翻案とみられる。さらに注目すべきは、この時の宣命の文言では、舍利が「全身」とされていることである。これは『法華経』見宝塔品にみえる多宝如来の「全身」を示す可能性が高い。この道鏡の法王叙任に関わるこれら一連の事件は、鑑真のもたらした舍利信仰が日本での仏教造像史に影響を与えた一事例とみる事が出来る。

第三節は、鑑真将来の「阿育王塔様金銅塔一區」について考察がなされる。この塔は、『集神州三宝感通録』ほかに記載される鄮県阿育王塔を模したものである。鄮県阿育王塔に関わる信仰史として、後代の呉越国王・銭弘俶が阿育王の故事に倣って八万四千小塔の造立を行ったことが特筆されるが、これら銭弘俶塔の特徴が『東征伝』の所説とよく一致する。阿育王塔の四面の本生図はいずれも「尸毘王本生」、「薩埵太子本生」、「快目王本生」、「月光王本生」といった捨身に関わる図像である。ここで検討したのは大きく二点で、ひとつは、第二章・第三章で考察した皇帝観・国家観と舍利関連遺品との関連が、八世紀中葉という時期にあってはどのような形を取るのかという問題である。『僧尼令』が含みこんだ戒律思想は『四分律』という所謂小乗戒であり、そこでは焚身・捨身が不法行為と規定された。対して、大乘戒を説く『梵網経』の第十六軽戒においては、捨身は菩薩行としてむしろ推奨される。さらに、七世紀後半期から八世紀初頭期の所謂国家仏教の確立期においては、天皇は、仏教の外護者としての転輪聖王という意味付けが付与されていたが、八世紀中葉、『梵網経』菩薩戒を受けることで、仏教の内護者としての「菩薩戒弟子皇帝」に変化したとする。このような天皇に関する観念、また戒律思想といった思想上の転換は、この阿育王塔の主題にも良く合致すると捉えることが出来る。ただ、阿育王塔が日本に定着した形跡が見えないも重視すべきであり、この点にも検討を加え、主題としての捨身が中国において盛行したのが南北朝時代であるといった複合的な要因が指摘されている。

なお、第四章には附論として、「聖林寺と観音寺の二体の十一面観音像をめぐる諸問題」が収められ、作風・技法面から八世紀第三四半期頃の官営工房に連なる作例として位置付けられる表題の二体の十一面観音像について、主に細部表現に着目し、その教義的・仏教史的な意味付け、造立背景が論じられている。ここで、論者が特に着目したのは、頭上面の相貌表現である。十一面観音像の頭上面、殊に右辺牙出面の相貌表現は、菩薩相から忿怒相へと変化していくことが知られ、従来、十一面観音經典に説かれる造像法の記載が相貌表現に影響しているという説明がなされてい

た。本章では、表題像がそうした変化の画期に位置付けられることを改めて確認し、従来の説明に対し、天平十五年以降に書写記録のみえる慧沼『十一面観音神呪心経義疏』による解釈との関連を検討した。すなわち、『義疏』には、牙上出面が礼拝者の清浄性護持に関わるとする解釈がみえる。上述の頭上面の面貌表現の変化には、かかる解釈が影響しており、ひいては八世紀初頭の唐に於ける法相教学の観音解釈が影を落としている可能性があるとする見解を提示した。またその上で、同期に官僧の清浄性護持が重要性を増し、官僧による山林修行が盛行するという歴史的状況が、表題像の造立背景として想定されると論じた。しかしながら、こうした清浄性護持に対する意識がこの期に高まりを見せることは、第四章において論じられた、阿育王塔の受容状況にも関連するように思われるとした。

本論文の締め括りとなる「結び」では、本論の各章で論じてきた諸問題を改めて総括し、東アジアにおける仏教美術を理解する上での、舍利信仰の重要性は、転輪聖王信仰と結びつくことで、舎利の所持が国家の仏教の正統性を示すという観念にあることを強調した。そして、近年唱えられている空海が日本における舍利信仰の画期となったとする見解に対して、中国則天期を中心とする初唐期の舍利信仰は、幾つかの点で変容しながらも、飛鳥時代後期から奈良時代に到る日本仏教彫刻史に強く影響したことを強調して、本論文を終えている。

(論文審査の結果の要旨)

仏陀または聖者の遺骨を舍利という。時代や地域ごとの思想的状況とも関連して軽重はあるものの、舍利信仰は、常に仏教に関わる造形活動の一大主題であり続けた。本論文の考察の対象は、主に七世紀第四四半期から八世紀、すなわち飛鳥後期から奈良時代に至る日本仏教美術史における舍利信仰とそれに基づく造形の問題であり、またこの期の日本における造形活動にも大きな影響を持った中国則天武后期の舍利信仰関連の作例も併せて取り上げている。これは、従来の日本仏教美術史研究では、舍利信仰の重要性が増大するのを平安時代以降とする見解が有力視され、それ以前の時期の舍利信仰の重要性が等閑視されていた嫌いがあったためである。本論文は、これらの時期に造られた仏教美術の諸問題についての検討を通して、飛鳥後期から奈良時代に至る時期における舍利信仰の重要性を顕在化させ、再評価しようとする意欲的な試みである。

本論文は、「序論」に続き、計四章の本文および第四章に付属する「附論」からなるが、本論文の検討を通して得られた主要な成果は、大きく二点に分かれる。

まず第一点は、第一章で明らかにされた唐則天期に絶頂を迎えた、舍利信仰が国家の正統性を保証する存在という思想が、日本の飛鳥後期から奈良時代でも受容され、こうした思想に基づく重要な造形作品が造られていたことを明らかにした点である。論者は、このことを長谷寺銅板法華説相図(第二章)と法隆寺五重塔塔本塑像(第三章)という著名な遺品の検討を通して行い、日本における舍利信仰がこの時期の造形に大きな影響を与えていたことを論証したことは重要である。特に前者については、図様の分析から、この銅板が舍利信仰の問題と絡みながら帝統の正統性の保証を意図したものであったとする指摘は注目される。また、後者については、西面の「分舍利」と東面の「維摩詰」がともに仏法相承の正統性に関わるものであるといった指摘は大変興味深い。さらに、第四章では、奈良時代の舍利信仰の受容を取り上げたが、光宅坊での舍利発現という、舍利が則天武后政権の正統性の喧伝に利用された事件の翻案とされてきた、隅寺毘沙門天からの仏舍利発現という事件の背後に、鑑真将来の「如来肉舍利」の影響があったことなどを指摘したことも注目される。

本論文のもう一つの成果は、各章で検討を加えた作例について、新たな美術史上の新見解を提示した点である。第一章の蒲州大雲寺涅槃変碑像については、この碑像が再生説法や如来常住思想を背景に制作されたところがあり、曇延系の涅槃宗の活動が本碑像の図像的な特徴に影響を与えたことを明らかにしている。また、第二章の長谷寺銅板説相図については、この種の遺品が『法華経』「見宝塔品」の経説を説話画的に表現するのが一般的でありながら、この作例ではその意識が薄く、むしろ「千仏多宝仏塔」の造形に関心を向けている点を指摘した。特に「千仏」が如来倚像と

ともに表されている点は、龍門石窟など七世紀後半期の唐代作例と類似性が認められ、これは仏法の相承、さらには帝統の永続を象徴していることを指摘した点は注目される。第三章では従来から見解の分かれていた法隆寺五重塔塔本塑像の配置問題について、新解釈を提示したことである。すなわち、北面の「釈迦涅槃」と南面の「弥勒下生」というラインを南北の中軸線とし、また西面の「分舍利」と東面の「維摩詰」が仏法の相承という観点から対応するとした、塔本塑像の配置について則天期の唐代仏教の影響を踏まえた興味深い説を提唱した。さらに、第四章については、鑑真が将来した「阿育王塔様金銅塔」をめぐる見解も注目された。この塔に表されていたとみられるのは、いずれも「捨身」に関わる図像とみられ、それは仏教の内護者として「菩薩戒弟子皇帝」となった奈良時代半ば頃の天皇に相応しいという指摘は説得力がある。さらにまた、第四章の附論で取り上げた奈良・聖林寺と京都・観音寺十一面観音像について、頭上面の一部を牙上出面に変化した理由を、『十一面観音神呪経義疏』の解釈等に基づき、これを礼拝者の清浄護持に関わるものとする、注目すべき見解を提唱した。

このように本論文は、七世紀第四四半期から八世紀の日本仏教美術史における舍利信仰とそれに伴う造形の諸相を検討し、この時期の日本仏教において舍利信仰が重要な役割を果たしていたことを明らかにした。また、分析の対象とした作例についても、数々の新見解を提示した論文として高く評価される。ただ、考察の対象としたこの時期の日本において、舍利信仰が仏教史上中心的な位置を占めていたかは、なお検討を要するところがある。第四章で言及された阿育王塔が日本に定着していないことの意味などの再考を含め、論者のさらなる研究の進展を待ちたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2013年10月3日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。